

# 『夜の寢覚』の「人聞き」「音聞き」「聞き耳」

高橋 由記

## はじめに

(1) 『夜の寢覚』巻一で、男主人公（以下、男君）は、女主人公（以下、女君）を但馬守三女と誤解して強引に契りを結んだ。この契りが、男君と女君のあやくな関係・すべての発端である。控えていた対の君は男君の素姓が分からないことを嘆いたが、それに対して男君は「げにことわりなれど、直々しきあたりに我まだきに知られじ。見では片時あるべくもあらぬを、おのづから、我がため、世の音聞き、見苦しくもどきなかるべきさまにてこそ」と、堪へぬ心を鎮めて、名のりもしたまはず」（巻一・33頁<sup>1</sup>）と、自分にとって外聞の悪くないようなかたちを望み、宮の中将を装った。男君が気にしたのは、受領の娘との関係に対する「世の音聞き」、

つまり外聞であった。このとき、女君の素姓を誤解していなかったならば、あるいは男君が素姓を偽らなかったならば、以降のこの物語はなかった。外聞を憚る男君の身分意識が、男君と女君の関係を複雑なものにして、物語を形作っていく。

ところで、物語を読み進めていくと、『夜の寢覚』には外聞や評判の意の「人聞き」(11例)・「音聞き」(9例)・「聞き耳」(8例)ということが散見することに気づく。<sup>2)</sup>『源氏物語』では同様の意の「人聞き」は16例、「音聞き」は4例、「聞き耳」は7例だから、『夜の寢覚』の用例の多さがわかる。<sup>3)</sup>では具体的に、『夜の寢覚』では外聞・世評・体裁といったものが、物語においてどのように機能しているのだろうか。そして、物語はどのように進んでいくのだろうか。小論では、『夜の寢覚』にみえる「人聞き」「音聞き」「聞き耳」に注目し、外聞や評判が物語にどのように関わっていくのかを考察する。

## 一 (第一部) 卷一

外聞や評判の意の「人聞き」「音聞き」「聞き耳」は、巻一から巻五<sup>4)</sup>のすべての巻にみえる。用例を抄出することは小論の意図から外れるので、全用例をあげる。なお、「人聞き」「音聞き」「聞き耳」の使い方に明確な区別があるように思われないので、考察の際に区別することはしない。また、場面説明では、外聞を気にした主体に二重傍線を付した。

まず、巻一からみていく。

01

「……直々しきあたりに我まだきに知られじ。見では片時あるべくもあらぬを、おのづから、我がため、世

(3) 『夜の寢覚』の「人聞き」「音聞き」「聞き耳」

の音聞き、見苦しくもどきなかるべきさまにてこそ」と、堪へぬ心を鎮めて、名のりもしたまはず。(33頁)

(場面) 九条の家での一夜が明け、対の君は男君の素姓がわからないことを嘆く。男君はもつともだと思いがらも、世間の噂を気にして名乗らない。

02

「……尋ねむにあとはかなきことにはあらねど、かうながらは、あながちに忍び寄らむも、世の聞き耳のいとほしきに、思ひとどこほらむほどや、おのづから隔たらむ」と思ふぞ、いと人やりならずあはれなる。(36頁)

(場面) 乳母の家に戻った男君は、外聞を気にしてぐずぐずしていれば、女君との仲が遠のくことを苦慮する。

03

「……なにがし(＝宮の中将)は、明日の契りは知らず、今宵まで思ひたまふるやうは、いと角生ひ、目一つあらむが、なほ品ほどもあなづらはしからざらむ人聞きこそ、深き心ざしなくとも、用ゐらるべきものははべれ。さる基さだめて、うち忍びては、海人の子をも尋ねはべらむ。……」(45頁)

(場面) 宮の中将は、角が生え、目が一つであっても、家格が相応だと人が思うような女性を、愛情がなくとも正妻として定め、そのうえで忍びの妻を尋ねたいという自分の結婚観を男君に語る。

04

「……『その人の女をこそ、いみじく懸想すなれ』など、『我は我』と思ふとも、まことしくとりなし言はれむ音聞き、なればかりならぬ身の際にもなほ苦しく思ひたまひて、とどめてしぞ」といふ心あがり、(46頁)

(場面) 噂のあった但馬守三女との関係は、その不体裁さから、自分のような身分の者であっても躊躇したこ

とを、宮の中将は男君に語る。

05

心のうちに、「我が思ふやうにうるせくものを言ふかな。なほ人に抜けたる人なりや。この君だちに、かく思ひけるよ。まことに、今宵ばかりを明かす心地、堪へがたくわりなくおほゆれど、知られて尋ねわび、かづらひまどはむも、いと音聞き軽々しう、便なかるべし。よくこそは、思ひのままに名のり寄らずなりにける。この君だちの聞かましとき、もどかしと思はれまし恥づかしさよ」と、思ひ固むるにしも、(46頁)

(場面) 宮の中将の話を聞いた男君は、その結婚観に賛同し、また、名乗らなかつた己の判断の正しさを確認する。そして、もし名乗っていたら、中將に軽蔑されただろうと考えただけで恥づかしいと思う。

06

「過ぎにしかたは、よしや、これにみな消えぬ。さて、そはいかがしたてまつらむずる。世の聞き耳、人の思はむことは、よろしきことにこそたどらるるわざなりけれ。……」(91頁)

(場面) 対の君から女君の妊娠を知らされた男君は、外聞や人の思惑は通常時にこそ気にするものだったと、語る。

07

大殿がちに紛れつつ、おほかたの人聞きには、「夢などの、つつしむべきやうに見え、心地も例ならぬを」と、のたまひなして(94頁)

(場面) 男君は、大君の視線を煩わしく思つて大殿がちなのを、夢見の悪さ故と世間的に取り繕う。

以上が巻一の用例である。「01」～「05」はいずれも同日(「01」「02」が明け方、「03」～「05」が夜)のことである。

(5) 『夜の寝覚』の「人聞き」「音聞き」「聞き耳」

「01」は、九条の家の一夜が明けた後の、男君の心内である。夜が明け、控えていた対の君は、男君の素性がわからないことの嘆きを口にした。それを聞いた男君は、もつともだと思いつながらも、受領の娘との関係の不体裁さを考えて、名乗らなかつた。「年もまだ二十にたらぬほどにて、権中納言にて中将かけたまへる、ものしたまふ。閨白のかなし子、后の御兄、春宮の御をぢ、今も行く末も頼もしげにめでたき」(巻一・21頁)男君と、「但馬守時明の朝臣の女」(巻一・27頁)との身分差は歴然としている。史実において、閨白室が受領の娘であることは珍しくないものの、閨白嫡男の室が身分相応の女性であることは、述べたことがある。<sup>(5)</sup>その意味でいえば、男君の判断は正しい。

「02」は、その後、乳母の家に戻った男君が、今後どのようにすればいいのか悩む場面である。外聞を気にしては、女君との仲が自然に遠のくことを危惧しつつ、結局、但馬守三女を中宮の女房として召すことにする。人の誇り、外聞を気にした故の選択だが、この選択が男性貴族社会における常識であることは、以下の「03」〜「05」によって確認されることになる。

「03」〜「05」は、その日の夜、宮の中将が語った結婚観と、それを聞いた男君の思いである。宮の中将は、妻に必要なのは世評恥ずかしからぬ家格であり、正妻を定めた後に、身分の低い女性を忍んで愛したいという己の結婚観、それゆえに、但馬守三女との関係を躊躇したことを語る(「03」「04」)。それを聞いた男君は、「我が思ふやうにうるせくものを言ふかな。なほ人に抜けたる人なりや。この君だちだに、かく思ひけるよ。」(46頁)と、その見識を認めた。そして、自分が名乗らなかつたことの正当性を再確認する(「05」)。「この君だちの聞かましとき、もどかしと思はれまし恥づかしさよ」(46頁)と、宮の中将に軽蔑されることを仮定するだけでも恥ずかしいと思うほどに、外聞は大切であった。「01」〜「05」は、わずか一日の出来事であり、男君が、女君へ恋情と外聞を気にする自制心との間で揺れていたことがわかる。女君への恋情による積極的な行動を思

いとどまらせたのは、外聞を気にする自制心だが、そうした考えが男君だけのものではないことは、宮の中將という他者のことばによって保証される。結局、女君への恋情を抑え込んだ男君は、但馬守三女の出仕を心待ちにしなが、源太政大臣の大君（＝女君の姉）と結婚する。対の君が男君に気づくのも、男君が新少將（＝出仕した但馬守三女）から、女君の素姓を聞き出すのも、男君と大君との結婚後である。男君自身「尋ねむにあとはかなきことにはあらねど」（36頁）と思つていたように、男君が望めば但馬守三女とつながりを持つことは可能だった。後に、対の君・僧都・中宮・男君など複数の人物が、大君との結婚以前ならば、男君と女君との結婚も不可能ではなかつたと思つてゐるように、もし、大君との結婚以前に男君が但馬守三女に対し何らかの行動を取つていたならば、事態は変わつていただろう。それを抑えたのが、外聞である。短い期間に繰り返し記される「音聞き」「聞き耳」「人聞き」ということばは、この物語に不可欠な要素であつた。

「06」「07」は翌年春のことである。はつきりと表れる男君の懸想に対し、女君側は冷淡だったが、女君の出産が近づいたため、対応に窮した対の君は男君に事実を告げる。男君は、女君をどこかに隠すことを提案するが、冷静な対処をするようにと対の君に窘められる。すでに男君にとって、外聞や世評は女君への恋情に劣るものとなつてゐる（「06」）。大君の視線を避けるために大殿がちなのを、夢見の悪さと言いなすように、もはや世評や外聞は男君にとつてかつてほど重要なものではない（「07」）。以前の男君は外聞を気にして恋情を無理にでも抑えていたが、女君の素姓を知つて以降、男君の態度ははつきりと恋情に傾いた。《受領の娘との関係》だけではなく、《妻の妹との関係》も外聞が悪いことは、巻二で確認されるが、以降の物語は、人から謗られようと女君を連れ出して二人の仲を確かなものにしよつとするとする男君と、それを窘める女君側という構図へと変化する。

二 (第一部) 卷二

続いて、卷二の用例を確認する。男君・対の君、そして異母兄宰相中将の助力により、女君は秘密裏のうちに無事女兒を出産する。女兒は生母を明らかにせずに関白邸に引き取られるが、男君の女君への懸想は、大君側にも知られることになる。夫と妹の関係を疑って大君は苦しみ、再び、外聞や世評が問題視されるようになる。

08

よその人よりはいと恨めしく、「いかなる巖のなかを求めても、かく心づきなきことを見聞かであらばや」と、おぼし乱れたることを見咎めきこえたまはむことも、さすがに人聞きいと便なし、(172頁)

09

(場面) 大君は、夫男君と妹女君の仲を疑い悩むが、男君のことを咎めるのも、外聞が悪いと思う。

「……はかばかしからずとも、かたみにこそは頼みをかけて、後見思ひきこえめ、と思ひわたるに、背き背きにさし隔てて、他人よりは人聞き恥づかしかるべきことをなむ、聞きはべる。……」(174頁)

(場面) 女君とは互いに頼りにし合っていたのに、女君が私から離れて、他人であるよりも世間的に恥ずかしいことを耳にしたと、大君は異母兄左衛門督に訴える。

10

宰相中将も、世の聞き耳をいとほしと思へど、「我が知ることにもあらず。さし離れむをいかがはせむ」と思へば、苦しくもあらぬに、ただ女の御身のよろづにいとほしげなるを見るにぞ、身にも替へつばかり心苦し

き。(177頁)

(場面) 女君の異母兄宰相中将は、世間の噂を可哀想に思う。

11

左衛門督、広沢に参りたまひて、「かうかうのことなむ、大納言殿の上のたまはせて、尼になりなむと、おぼしたちてはべる。いづれも同じことにておはしませど、世の音聞きの例なかるべき、いとたいだいしく思ひはべるを……」(178頁)

12

(場面) 左衛門督は広沢に行き、大君の嘆きと、妹が姉婚を奪うことの外聞の悪さを父入道に訴える。

おぼしたる御心焦られのままに、さもおぼしたちぬべかめれ、と思ふ、人聞きもいとうたて。さはあれど、かけ離れなむあはれも浅からず。(190頁)

13

(場面) 男君は大君の心中を付度し、妻の出家は外聞が悪いと思う。

いみじき過ちありとも、思ひ憚る人やありける。にくく、心づきなくおほゆとも、世の聞き耳を忍びやかにもてなして、言ひ教へてはあらで、ひたぶるにのしり、はしたなめたてまつる恨めしさに、(200頁)

(場面) 女君のことを不愉快に感じて、外聞を繕うべきなのに、教えるのではなく、ののしるのが恨めしい、と入道は思う。

卷二の用例も集中している〔08〕〔11〕が、これは夫と妹との関係を疑った大君が悩むことと関係している。

大君は巖の中に籠もつても嫌な噂は聞きたくないと思うが、かといって夫を咎めることも外聞が悪いと



(9) 『夜の寝覚』の「人聞き」「音聞き」「聞き耳」

悩む（108）。貴顕の女性は嫉妬心を露わにするのを良しとしない。例えば『源氏物語』で、浮舟の引取について薫から報告を受けた今上帝女二宮は「いかなることにも心おくものとも知らぬを」（『浮舟』⑥161頁<sup>6</sup>）と答え、『夜の寝覚』でも、女二宮は「いみじくおぼすとも、なほなほしき御物恨み、気色など見えさせたまふべくもあらず」（巻五・480頁）と恨みを口に出すことをしなかった。大君は皇親ではないが、親王女を母に持つ太政大臣女である。体裁を氣にして嫉妬を口に出せない大君は、忍びきれずに異母兄左衛門督に訴えた。このことは、事態をより複雑にし、源太政大臣家を二つに分裂させることになる。大君は、夫と妹との関係は、他人よりも外聞が悪いと左衛門督に訴えた（109）。大君の嘆きを聞いた左衛門督は驚き、以降、「大君―左衛門督」と「女君―宰相中将」の二つに源太政大臣家は分かれる。この分裂・対立が、第二部の女君と老閨白との結婚につながると思われる。

左衛門督は必要以上に女君を悪し様に罵り、宰相中将は女君に対する世評を氣の毒だと思う（110）。さらに、左衛門督はわざわざ広沢に赴き、父入道に女君の悪評を報告する（111）。

ところで、大君や左衛門督は、「人聞き」「音聞き」の悪さを理由に、女君を非難する。大君は、皮肉を込めつつ「似つかはしき御あはひにもあるべき」（175頁）と、男君と女君が似合いであると語っており、左衛門督も「いづれも同じことにておはしませど」（178頁）と、仮に男君と女君が結婚しても、閨白左大臣家と源太政大臣家との結びつきが変わらないと口にしてている。《二人は似合いだが外聞が悪い》、《両家の結びつきは変わらないが外聞が悪い》と、外聞・世評は、大君や左衛門督にとって、女君を非難する格好の口実として使われている。巻一の「07」の用例のように、外聞や世評は事の真相を包む隠す口実であった。

左衛門督という味方を得た大君は、男君に対しても嫉妬を露わにするようになり、出家を口にする。妻の出家の外聞の悪さを男君は思う（112）。女君は邸内での身の置き所のなさから、父入道のいる広沢に移るが、

女君の美しさを見た入道は世評が悪くても繕うものなのにと、女君を不憫に思う〔13〕。

以上、巻二における用例は、男君の女君執心が女君側に知られたことによる、大君〔08〕〔09〕・宰相中将〔10〕・左衛門督〔11〕・男君〔12〕そして入道〔13〕の心中やことばにみえる。大君や左衛門督は、外聞の悪さを口実にして女君を責める。その結果、女君は広沢へ移ることになる。『夜の寢覚』第一部においては、外聞・世評は、人物の行動を規制し、また、人物を移動させるきっかけとなった。この後、『夜の寢覚』には欠巻があるが、欠巻部分において女君が老閨白と結婚することになったのも、外聞を気にする大君や左衛門督（とくに、左衛門督）が話を進めたことも一因であろう。

### 三 (第三部) 卷三

第二部（中間欠巻部分）を経て、物語は第三部になる。第二部と第三部の間には約八年の空白があり、女君と老閨白の結婚、女君のまさこ（実父は男君）出産、女一宮の男君への降嫁、大君の女児出産と死、老閨白の死などが書かれていたと推定されている。

以下、巻三の用例である。

14

「……我がためつらきは、よく思へば、またさることぞかし。いつしか、さらばと、靡き寄りなましかば、うれしさはさるものにて、世の聞き耳あざやかにはあらざらまし」と、思ひつづけられたまふに、いとど心のみしみまされど、(239頁)

(場面) 尚侍（＝老閨白長女）参内の準備のすばらしさを見につけ、男君は女君のすばらしさを再確認する。

もし女君があるとき靡いたならば、嬉しいけれども、外聞は悪かっただろう、という。

15

「内々の曇りなさは知らず、かばかりもおはしますは、やがて、流れての濡衣となりなむずること」と思ふに、なべての世の「人聞き」などまでもただ今はおぼえず、内の大臣に、「あな、思はず」と、うち聞きつけられたらむ恥づかしさ、苦しさに、(280頁)

(場面) 帝闖入事件に関連して、女君は今は世評にまで思いが及ばず、ただ、男君が聞いたらどう思うのかを辛く思う。

16

「さばかりもあはつけう、行くてに御覧じつけられたる、世の「音聞き」、人のいかに思はむことは、罪のがれやるべきかたなくはべれば……」(293頁)

(場面) 帝に姿を見られたことについて、世評や人の思惑は自分の落ち度だと、女君が尚侍に語る。

17

「……げに、思ひのほかに、事にもあらず、よき釣舟のたより出で来て、なかなか、我とおぼしたましましよりは、世の「聞き耳」さらぬ顔にて、かならずかかることありぬべきなめり。……」(314頁)

(場面) 尚侍参内という口実で世間を欺いておいて、帝闖入などが起こつたと、男君が女君に恨みをいう。

「14」は、老閨白長女が尚侍として出仕するに際して、女君の用意が周到であることから、男君が女君のすばらしさを再確認し、女君の自分への冷淡さも道理だと思ふ場面である。女君が安易に自分に靡いたならば、嬉しい反面、外聞は悪かったであろうと回想している。女君が男君に冷淡な態度を取つたのは、女君側が外聞を気にしたということだろう。巻一で外聞を気にして自制したのは男君だったが、巻二以降、外聞よりも女君

への恋情を優先する男君に対して、外聞や世評を気にするのは、もっぱら女君周辺の人物である。

「15」～「17」は、卷三最大の事件である帝闖入事件に関連する。尚侍出仕に従って参内した女君を垣間見た帝は、執心止みがたく、一夜、女君を取り込める。その火急の折、女君は外聞まで思いが及ばず、男君の思惑を真つ先に気にしたというが「15」である。女君の男君への思慕が表出しているが、逆に、平時において、女君の言動を規制していたのが外聞・世評だったこともわかる。第二部、老闕白の死後に男君が女君と逢う機会を得たことは『物語二百番歌合』から窺うことが出来、また、のちに男君が女君に「きこえしままに靡きたまひたらましかば」(卷五・503頁)と語っているから、男君が女君をかき口説いたことがあったのだろう。しかし、その折に女君が靡かなかつたことは、現存部分から明らかである。夫の死後、間もなく別の男性に靡くことを世間が良しとしないことは、『源氏物語』にも見え、女君の意思によって、男君と女君との関係には一定の距離があつた。第一部や第二部、そして第三部のこの時点における、男君と女君との関係を形作つたのは、男君あるいは女君による、外見を憚る意識である。

その他、帝に姿を見られたことに対する世評は自分の落ち度だと尚侍に語る場面(「16」)と、尚侍参内を世間的にはよい口実にして帝に近づいたと男君が女君を責める場面(「17」)に外聞がみえるが、この帝闖入事件をきっかけにして男君と女君は久しぶりに打ち解け、物語は新たな展開を迎える。

ところで、現存部分では、第三部になり、はじめて女君自身が外聞を気にしていることが記されることは注目に値する。卷二後半までの女君は、新編全集頭注が「無意思の人形のような女主人公」(221頁)と記すように、ほとんど自分の意思を持たず、周囲によって助けられたり、蔑まれたりしていた。人形のような女君が外聞を意識することはない。しかし、卷二後半そして第二部におけるさまざまな経験が、女君を自我を持つ女主人公として成長させたといえる。男君と女君の関係が公ではない以上、女一宮という室を持つ男君と、老闕白室で

あつた女君との関係には、外聞や世評がつきまとう。大君や老閔白が没し、対の君や宰相中將の登場がほとんど見られない第三部において、男君と女君の関係を規制するのは、女君自身の意思である。

#### 四 (第三部) 卷四

続いて卷四の用例を確認する。

18

我が心にも、「いかにぞや。心やましく、恨めしき節なきやうにあべきにもあらぬを、いかで、いとさ  
人聞き残りなくはあらじ」と思ふ、(350頁)

(場面) 女君は、男君に対し、女一宮のことなど、恨めしい節もないわけでもなく、すっかり靡いたと世間に  
取りざたされたくないと思う。

19

「……これは、世の聞き耳のうはべをもて離れて、心のうちには、あはれともかたじけなしとも、身にしみ  
て思ひ知り、うちながめむこそ、世にわびしく、胸痛かべけれ」と、つくづく、とばかりもの言はれずおぼ  
しつづけて、(356頁)

(場面) 今回の帝との件は、外聞のため、表面上はよそよそしくしているが、内心は嬉しいと思っているだろ  
うと、男君は女君の心内を付度する。

20

「……この人には、いみじき御心ざし限りなしといふとも、さらに、なかけて行き通ひたまひそ。かの

人去りがたうおほされば、宮に、さらに、人聞きばかりをおほいて、絶えぬさまに、なつくるひおほしそ。  
……」(385頁)

(場面) 女君と離れがたいならば、女一宮に対して外聞のために取り繕うことはしないようにと、大皇宮が男君に請う。

21

「昔より今にとり集めて、なれる我が身と言ひ顔にあれど、もとより、心のいとおろかに、浅うなりにければ、よく思ひも入れて、千々の憂き節をあまり思ひ過ぐし来て、言ひ知らず疎ましう、音聞きゆゆしき耳をさへ聞き添ふるかな」と、(388頁)

(場面) 生霊の噂を聞き、今までさまざま辛い目に遭ってきたが、今回のうとましい噂まで聞くことになった  
我が身を女君は嘆く。

22

「……その折ばかりこそ、いささか、身の人聞き目やすきほどはありけれ」など、つくづくとながめ出でたまふにも、胸よりあまり堪へがたければ、(390頁)

(場面) (生霊の噂に関連して) 老閨白の室であったときは、少しは外聞が良かったと、女君は我が身を思い返す。

23

「この人ゆゑこそ、もし姨捨ならぬこともやと、思ひ寄りきこえさせしか。慰むかたはなかりしものから、あまりの御もてなし、心構へのいと心憂き御あたりにて、げに人のため、世の音聞き心憂きことを言ひ出でて、本意のこと逆へられたるは、妬く心憂きわざかな。……」(423頁)

(場面) 女君への恋情が紛れるかと、女一宮と結婚したのに、生霊の噂まで言い出して、本来の願いと逆になつたのが残念だと、男君は思う。

男君と女君の久しぶりの逢瀬の後、帝の執心はそのままに、女君は宮中を退出する。宮中を離れて老閨白邸に戻った女君は、ようやく平時の自分を取り戻す。それは外聞を気にすることにつながる。

たびたび訪ねてくる男君に対して、女君は女一宮の存在や外聞・世評を気にして、男君にすっかり打ち解ける気はない(「18」)。

帝から女君への手紙を見た男君は、帝の強い執着を知り、女君の心内を忖度するのが「19」である。女君は男君の勝手な想像に恨み言を言いつつ、二人の仲は深まるが、そうした中、女君を名乗る生霊が表れて、女一宮を苦しめる。生霊の噂を否定して女君をかばう男君に対して、女一宮の母大皇宮は、外聞のために女一宮との関係を取り繕うことはやめてほしいと請う(「20」)。この生霊事件は、巻四の最大の事件であるとともに、男君・女君・女一宮にとっても転機となる事件であった。巻四前半までの女一宮は存在が希薄で、それほど描かれることがなかったが、病を得て降、男君は「世に苦しかるべきことは、二方に心分くるに増すことこそなかりけれ。」(巻四・396頁)と、女君・女一宮の双方に心を分けることの苦しさを感じるようになる。これ以降、物語における女一宮の存在感は増していき、第四部においても重要な存在であったろうことは、述べたことがある。女一宮の病・生霊事件は、男君・女一宮にとって転機となったが、女君にとっては醜聞であり、外聞・世評に悩む女君(「21」「22」)は、広沢の父入道のところに移ることにする。

「23」は生霊事件という噂を広めた大皇宮に対する男君の恨みである。

## 五 (第三部) 卷五

最後に卷五の用例を確認する。

24

「……移ろひしほどなど、あふなう髪などをも削ぎやつしてましかば、さしあたりしその折こそうたであるやうなりとも、入道殿も言ふかひなく、そのかたにもてないたまひて、いかに思ふことなうさはやかに、この世もおのづから住み着き、後の世はたいかに頼もしく、人聞きも物思ひ知り顔にてはやみなましものを。

……」(432頁)

25

(場面) 昔、広沢に移ったときに出家していれば、後生も頼もしく、外聞も良かったのにと、女君は思う。

「……いみじくおぼしとりて入りたまひけむ山路を、御髪長く生ほして、ただならぬこと添ひ、出でたまはむ、人聞き恥づかしくあるべきことなれど、いかがはせむとおぼし消つばかり」と、うち笑ひ、たはぶれきこえたまふ。(499頁)

(場面) 出家を覚悟して広沢に来たのに、出家もせず、妊娠がわかつて山を下りるのは外聞も悪いだろうけれどもと、冗談めかして男君は女君を元気づける。

26

「……すべて、昔より御心のいみじく恨めしきが怠りなりや。きこえしままに靡きたまひたらましかば、しばし音聞き乱りがはしきもどきを我も人も負はましか」など、今とりかへし恨みつづけたまへば、(503頁)



(場面) かつて自分が女君に話したときに、靡いてくれたら、しばらくは外聞は悪からうが、今ほどではなかったと、男君は女君に恨み言を言う。

27

例には違ふ心地して、静心もなく思ひながら、世の聞き耳ことわり失はぬ御心にて、宮の御方に二夜、こなたに一夜と、なよ竹のほどには過ぎたる御もてなしをも、(511頁)

(場面) 男君は外聞や道理を失わないので、女一宮のところへ二夜、女君のところへ一夜の割合で通っている。

28

「されば、ただ宮を迎へ取りたてまつりて、また再びあひ見せたてまつりたまはし」とのたまはずれど、「それ音聞きいとけしからず。なほなほしきことなり。……」(522頁)

(場面) 男君が女君の身内をことごとく昇進させることに憤慨した大皇宮が、一品宮を引き取るように朱雀院に進言したのに対し、朱雀院はそれは外聞が悪いと諭す。

生靈事件に悩み、広沢に移った女君は出家を決意するが、かつて広沢に来たときに出家していれば、こんな醜聞もなく、外聞も悪くなかったのにと悔やむ(24)。女君の決心を知った男君は、急ぎ広沢に迎えに行く。出家は、妊娠が明らかになったことで立ち消えとなり、女君は男君とともに京に戻ることになる。その際、男君は「25」のように冗談めかして女君を励ます。

京に戻った女君は、老関白邸ではなく男君邸に入った。男君は女君に対して、かつて靡いてくれたら、こんなにいつまでも世評を引きずることはなかったのにと恨み言を言う(26)。卷三の「14」では、あるとき女君が靡いたならば、外聞は悪かっただろうと考えていたのとは、まったく逆の言い分である。男君は、かつて靡いたならば外聞が悪かったとも(14)、あるいは醜聞は一時だったとも(26)言っている。男君と女君

の関係において、男君が想定する外聞の悪さには、絶対の基準があるわけではない。

女君を自邸に迎え、二人の関係が一定の安定をみた後、男君は再び外聞を気にする。その結果、女一宮に二夜、女君に一夜通うという（「27」）。火急の時には外聞を気にすることをせず思い切った行動をするのに対して、精神的に安定すると外聞・体裁を重んじるのは、今まで見てきたとおりである。

「28」は、男君が女君の身内ばかりを昇進させることに憤った大皇宮が、朱雀院に女一宮の引取を提案し、朱雀院に外聞が悪いと窘められる場面である。

現存部分は、女君が自分の立場を諦観するところで終わる。第四部は女君の偽死事件・冷泉院のまさこ勘当事件などがあつたらしいが、詳細は不明である。

## おわりに

以上、『夜の寢覚』における「人聞き」「音聞き」「聞き耳」の用例を見てきた。『夜の寢覚』には、外聞や世評を意味することは多く使われている。中でも巻一における外聞の重要性は、この物語を方向付けるものとして必須だった。巻一では、男君が女君への恋情に揺れながらも、強い身分意識によって自制し、行動を控えたことが、以降の物語の発端となった。ここにおいて、男君は恋情のままに行動してはいけないのである。もし、男君が行動したら、この物語はそこで終わる。外聞・世評は巻一において、あるいはこの物語においてなくてはならないものだった。また、巻二においては、大君や左衛門督が外聞の悪さを口にして女君を非難し、それが女君の広沢行きにつながった。ここでは外聞や世評が、建前・口実として使われている。そうした中、巻二後半までの女君は「無意思の人形のような女主人公」（221頁）であり、外聞を気にしたという描写はない。

(19) 『夜の寝覚』の「人聞き」「音聞き」「聞き耳」

女君は大君との関係に心痛めながらも、世評・外聞を気にするところまでに至っていない。

女君の成長が見られる第三部では、女君も外聞を気にするようになり、「人聞き」「音聞き」「聞き耳」の用例も多い。ただ、巻一ほど重要な用語ではない。用例はほぼ男君と女君に限られ、外聞や世評を気にするのは平時である。男君と女君との間には既に二児がおり、社会的立場も変わった。男君と女君の關係に一定の距離を保たせていたのは、女君の外聞を気にする意識だったが、巻五で女君にとって懸案だった入道にも二人の仲は認知された。そして女君は男君邸に入り、第三子を出産する。男君には女一宮という室がいるものの、女君も男君室とみなされたといつてよい。物語の進行とともに、気にしなければならない外聞の悪さは、少しずつ解消されていった。外聞が物語の進行にそれほど関わらなくなったのも、人物の成長と物語の進行からいえば、当然といえよう。

注

- (1) 『夜の寝覚』の本文は、鈴木一雄氏校注・訳 新編日本古典文学全集『夜の寝覚』（小学館 一九九六年）による。私に注をつけたところがある。
- (2) 外聞や評判という意ではない用例は除く。また、評判の意を持つ語として「(世の)聞こえ」「(世の)おぼえ」もあるが、これらは、改めて考えたい。
- (3) 『源氏物語』における「人聞き」「音聞き」「聞き耳」の用例は、第三部（とくに「東屋」巻）に多いことも付け加えておく。
- (4) 『夜の寝覚』は中間と末尾に欠巻のあることから四部に分けて把握するのが通説となっており、小論でもそれに従う。
  - 第一部―巻一・二（三巻本では上巻）
  - 第二部―中間欠巻部分
  - 第三部―現存巻三〜五（三巻本では中・下巻）
  - 第四部―末尾欠巻部分

- (5) 拙稿「撰関家嫡子の結婚と『夜の寝覚』の男君——但馬守三女への対応に関連して——」(『国語国文』七三・九 二〇〇四年九月)
- (6) 『源氏物語』は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男氏校注・訳 新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥(小学館 一九九四年～一九九八年)による。丸数字は新編全集の巻数。
- (7) 『物語二百番歌合』二二〇番歌(作者は関白)は現存部分にはみえず、おそらく第二部の歌と思われるが、詞書に「年久しく絶えて後、めぐりあひたまへる秋……」とある。男君と女君が久しぶりに逢う機会を得た秋の歌で、新編全集の「中間欠巻部分の内容」では、「老関白の死は、寝覚の上(筆者注 女君)と男主人公との間を再び近付けるかに見えた。遺された人々の後見として内大臣(筆者注 男君)は、寝覚の上に逢う機会をつかんだのである。数年ぶりの邂逅であった。」(226頁)として、二二〇番歌を載せる。なお、和歌や詞書は『新編国歌大観』(角川書店)により、私に表記を改めた。
- (8) 『源氏物語』で玉鬘は、継娘真木柱のもとに、螢兵部卿宮没後ほどなく紅梅大納言が通い始めたことについて「故宮亡せたまひて、ほどもなくこの大臣の通ひたまひしことを、いとあはつけいやうに世人はもどくなりしかど」(『竹河』⑤112頁)と回想している。
- (9) 拙稿「『夜の寝覚』の女一宮——降嫁した内親王の問題として——」(『明星大学研究紀要』日本文化学部・言語文化学科) 一四 二〇〇六年三月)